

# ・白選五十一首・



## 来嶋靖生

きじま・やすお 1931年、中国・大連市生まれ。51年早稲田大学入学後、「早大短歌会」に入る。篠弘、原田清、橋本喜典らが出た。この後、「槻の木」に入会し、都筑省吾に師事する。長く編集者生活を送る。現在、「槻の木」編集代表。歌集は『月』『雷』『峠』『拳』など多数。

はたらきてこの日も終へぬ風鳴りを遠く聞きつつ階段のぼる

瑣末なることにこだはりゐしわれよ今宵は鲁迅を読みて眠らむ

さしのべし妻が掌握りたり母となりたる掌のあたたかさ

幌のうち暗きに返本とわれらゐてトラックは走すいづこへと知れず

夜ふけて窓うちやまぬ風のあり海のいづこに風は生まるる

八ツ山橋渡りきたれば吹きつくる風あり風に面向けて行け

人間の夢を聚めて空に照る遠き世に生れいまを澄む月

無理に堪へ我慢を重ね生き来しと空穂は言へりテープに残る

身を沈め湯舟より湯を溢れしむ何ほどのわが人間の量

封じたるのちの思ひに悔あれど手紙は言葉過ぎざるがよし

崑崙の山のはるかを行く鵬の一声鳴けり夢にわが聴く

「月」

「雷」

早稲田の短歌会に入ったのが一九五一年だから、年数だけからいうと作歌歴は半世紀を超えたことになる。ときどき立ち止まったり、ペースダウンしたこともあるが、何とか続けてきた。

はじめの頃は、貧しい学生生活、出版物編集者としての生活から生まれてくる歌が多かった。職場の歌はある意識をもって詠み続けてきた。勢い夜の歌や夢の歌が多くなる。そしてまた折に触れて、少年時代の外地での生活や引き揚げ体験を思い出しては、記録として詠み残そうと努めた。

私は都筑省吾先生に歌を学んだ。都筑先生は窪田空穂に学んだ人だから、私の歌はおのずからこの二人の影響が著しい。「美」よ

極書読むは侘し系ものいはぬものちからは極を凌ぐ

膝詰に迫らるるときかなしみてさまよひ出むかわれの和魂

ひもじさに耐へつつ成りし思想ゆゑいまに捨て難しペンとり直す

待むべき明日ありとしも思はねど涌き立つごとき春の夕雲

おもむろに階くだりゆくわが影の幾重にも折れ地上にとどく

われよりも重きリュックを負ふ妻の息深く吐きまた歩み出づ

笑ふこと稀となりたるわが顔が今宵職場の窓に映れり

波立ちてあらぶる暗き海の上に天をまたぎて立つ蒼き雲

唐詩は酒 宋詩は茶とぞ譬へ言ふ戦後短歌は何としいはむ

火を二つ重ね炎になるといふいくつ火の燃えわが想ひある

北指してかへる鶴らが行き行かむ天路を想ふ地上にわれは

幽世の声とも聞こえ風は鳴るはじめをはりのあらぬその音

雪にまみれ真白となれる道しるべ幽かなる世を指し示すらし

凍てはじめたる雪道を踏みかへる持続は冥き力なるべし

さはさはと風わたる尾根に出で立てり頭の紺のバンダナほどく

たかぶりてももの言ひしこと峠路の一樹のごとく杳くなりたり

尾根を越え遠く翔び去る岩つばめかへらぬものをわれは眼に追ふ

冷えまさりゆふ薄氷むすぶらししき降る雪は水面に溶けず

とりとめなき履歴の中にかの山の隆起のごとき濃きみどりあり

離り来てことさら思ふ断崖に海覗くごと立ちるし一樹

「峠」

「山」

りも「まこと」に重心がかかる。野暮つたい  
と言われても、それはそれでよい。

ひところは、空穂的だとか、都筑調などと  
他人から言われるといやな気持がしたものだ  
が、今はそう見られても結構、(しかしなお  
かつ違う、その違いがわかるか!)と開き直  
った心境になっている。

会社勤めを辞める頃から少しずつ山に登り  
はじめた。三百座ぐらひは登っただろうか。  
山に登るうちに、いまさらながら自然の大き  
さに打たれ、以前、職場の歌へと向いていた  
歌心がしだいに自然へと傾くようになった。  
選んだ歌の後半は山にかかわる歌が多い。歌  
集の後記にも書いたが、ただ山に登りました  
ではなく、私だけが詠める山の歌を形にした  
いと願っている。

最後の一首は、昨年来いろいろと話題にな  
った歌なので、あえて加えた。

私は短歌の美しさは文語定型にあると確信  
している。とくにその韻律性が生みだす格調  
の高さは、いまなお口語や非定型の歌の及ぶ  
ところではない。

もちろん口語の歌はそれなりに佳いと思う  
し、私も部分的には口語を使う。が、詩語の  
体系としては、まだ口語は未完成である。文  
語定型の基本線を守る、ということは私の歌  
の使命だとさえ思っている。

行き暮れてなほわが越えむ峠あり風吹きあげてこの身は疎む  
望み見む未来などなしさりながら背伸びして拭く書庫の天窓  
いつの夜かこの細川の水の上に光る蛍となれやわが歌

帰りきてまだ灯ともさぬ部屋に射すむかしのままの秋の月光  
怯みなく鳴けやこほろぎ空に照る月は無償の光を放つ

手放しし職惜しむにはあらねども月に曝さむ孤のおもひあり

マツチより生れし炎のつきつきに枝を伝ひて火の育ち行く

肩目指し一步一步を歩むなり天に真近くそそり立つ肩

空遠く山のはたてに道続きかなしや人間一步のあゆみ

おのづから至れる朱に身は染めて秋日のなかに立つはぜもみぢ

成らむとし成りたるものにあらざればことさら親し日に照る紅葉

日に映えてかがよふこともあらぬまま山に過ぎ行く木々もあるべし

石走る激ちならねど滴々の真清水をわが韻律とせむ

心急ぎ人は山路を下るなれ花は一所にとどまりて咲く

岩角に手をかけ足を踏みて攀づ首出せば見ゆ天上の藍

灯の下に拳を握りまたひらく何一つなきものの清しさ

野に遠く光るは忘れ水ならむ絶ちし望みの蘇るべし

水の面にはらりと落ちし一葉ありその黄金の葉をのせて川行く

事故ありてニューヨークに原爆炸裂す不機嫌なる日のわが白昼夢

二

「拳」

「拳」以後